

子ども甲状腺がん裁判

原発賠償関西訴訟原告の投稿から、表題の第1回口頭弁論での原告の意見陳述を視聴した。意見陳述に際して練習したときの録音であるが、心にせまるものがあった。福島在住の女学生が原発事故のあとに検査を受け、甲状腺がんと分かり、入院・手術を繰り返す。大学に進学したにもかかわらず、がんが再発して中退を余儀なくされる。苦しい闘病生活が切々と語られる。この裁判についてあまり知らなかったので、「311 甲状腺がん子どもネットワーク」にアクセスしてみた。

原発事故当時の幼稚園生から高校生まで男女6人が、東京電力を訴える裁判の原告になった。小児甲状腺がんは、通常100万人に1～2人(年間)と言われる極めて珍しい病気で、チェルノブイリ原発事故後に増えたことが知られている。この10年間で、約300人もの子どもや若者が小児甲状腺がん



と診断され、手術を受けている。この中には、再発や遠隔転移している子どももいる。しかし、国や福島県は、原発事故とこの小児甲状腺がんに関係はないと主張。自分はなぜ、稀少な病気である甲状腺がんになったのか…。将来、再発や転移は起きないのか…。こうした思いを抱えながらも、多くの患者がこの10年間、声を上げることができずに過ごしてきた。若い彼・彼女たちは、進学や就職といった人生の大切な時期に、手術や治療を経験し、苦労を重ねている。それでも多くの患者たちは、差別や偏見を恐れ、孤立してきた。そんな患者たちがついに立ちあがる。

弁護団長の井戸謙一弁護士「曇りない目で見れば、福島で小児甲状腺がんが多発していることは明らかであり、その原因は被ばくであることしか考えられません。しかし、その明白な事実が大きな力で否定され、多くの若者が先の見えない生活の中で苦しんでいます。被害は補償されなければなりません。何が事実であり、何が正義なのか、司法の場で明らかにしたいと思います」

弁護団副団長は河合弘之弁護士と海渡雄一弁護士。

アイリーン・美緒子・スミスさん「一生にわたる被害を受けた10代、20代が立ち上がり、初めて起こす裁判を、全国、そして世界の人を知り、応援していくことが大切です。先頭に立つのは、いつでも大変なこと。この高いハードルを越え、原告となったみなさんの勇気に敬意を表します。人災事故である福島原発事故によって、若い世代が生涯にわたる深刻な傷を負う。許されることではないです。被害を起こした社会にしっかりと責任を取らせる裁判にしていきたい」

原発賠償関西訴訟などとともに、子ども甲状腺がん裁判にも注目していきたい。

(2023年5月29日)